

自由律俳句 層雲

城の会句集 復刻版

I II III 合冊本

層雲 城の会句集Ⅰ

鯨のたわ言

これはいつ頃だっただろうか、いつもの句会の折、なにやかの話のついでに、われわれ故人句集は、とても無理だがから始まりそれはその通り、“城の会”と名前だけは層雲ゆかりの立派な名前をもらっているが、層雲入門が一番古いものでも近々五年か六年め、いわば層雲の歴史から見れば、昨日今日の洩たれ小僧ばかり、と、まあ笑い話ぐらいだったのですが、それがどう煮詰まったのか、それなら城の会の歴史としての、せめて年刊句集ぐらいはと、とうとうひょうたんから駒が出まして、それではと、とり敢えず城の会句集第一として斯くなりました次第、まことにおこがましくお恥ずかしい限りですが、未熟者揃いのお粗末な物を並べました。

それぞれの句はほとんど層雲誌上に載せてもらったものですが、何卒諸先生諸兄弟笑又大笑して見てやってください。お願いいたします。

城の会一同

昭和五十一年（一九七六年）十二月

目次

佐藤百秋

鬼頭いわお

加藤定一

加藤霞山

石原武雄

佐藤弘典

吉田雅童

伊藤清雄

下村直樹

佐藤士門

佐藤百秋（本名 清）

明治四十二年生

職業 日本画家

雨の牛なく夕餉

木立ちを鳴らし時雨白いあししてゆく

孫をつれき来た墓の昼を地になく虫

引く糸天にとけこんで風坐る

破れた手袋門先でとって入る

夜更けに墨をする笥の音

角隠しのまぶかにある瞳

たんぼに一本の電柱が工場を動かしている

蝉しぐれ、御堂ふかきに木魚の音

蝉しぐれ、あけはなして法衣かけておく

屋根屋根のいらか霜おりる光りは月光

少年石を投げて夕焼に波紋を競う

炭火ようやく赤くアトリエの夜更け

水たまりが陽だまりで朝の雀

ぬぎすててすずしい今年竹

窓がらすに月が張りついた寒夜の目ざめ

星が降るほどにぬれているテラスの風鈴

ちよつと着替えて朝の清潔感へ出かける

音たてて燃ゆる枯草に実のあり

ここへ坐ってもらう座布団をおく

鬼頭いわお（本名 岩男）

大正二年生

職業 教員

今日もまたガラス戸に笑顔写して部屋巡り行く自閉の子

揚げ潮は大小のごみ従えてゆるりゆるり

大寺の屋根鳩五六羽のせ大地おおう

車渋滞、橋の下はツバメすいすい

野　　バラ咲く堤防近く潮ひたひた

達者だなも、腰伸ばし伸ばす老婆

そこの残飯つつく雀のこえする

草の上、バツタ取りの少年の裸足はよし

散り散りに花、別れ行く二人

柿若葉毛虫の黒い影をのせている

炎天にあえぐ犬の舌長く

梅雨の道、黄色い傘がさわいで行く

電話の声のきれいな主である

よしきりの声を残してバス発車する

つらつら椿いつも土蔵のかげにいる

水がめどっしりと秋を浮べる

みのりにバツタはじけ跳ぶ

芋どもころころ手なべの中

いつもの調子に乗った酒となる

加藤定一

大正四年生

職業 染料販売業

いろいろな過去をもって雨の炬燵に居る

大空の蕾を確める

二人で考へて居ても雨の音ばかり

濡れている若葉のいろへくつろぐ

乗り後れてこそその美しい星と空である

外は五月雨屋根のある吾家かな

華やか昔の人新聞の片隅で小さく逝く

孤独が捨てた吸殻梅雨に濡れて消えて

丁重に辞去してからいつもの顔になって歩く

となりの機械の単調な音を日々の生活とする

人の世の片隅にひっそりと白いくちなし

水たまりの深い大空をのぞく

昨日人の逝った家もうせっせと商売している

返事をしてから思い出した後姿が闇

秋草、遮断機と共に待たされている

道端に昔の事件が点々と彼岸花

事情はどうあれ変らぬ新藁の匂ひかな

夕日は山に大きな空の一日であつた

格子あければ大輪の菊いつせいに迎える

黒い屋根が生んだ見事な満月である

加藤霞山

大正十五年生

職業 会社員

のぼり職太い字書いているのへ大きな声かけて通る

竹がしずくする梅雨の小みち友がきてくれた

今朝かえした傘夕方又借りて帰る

ここより冠水しているみちを変える

雷 魚 ゆ う ぜ ん と 泳 ぐ 水 面 台 風 一 過

柱 の 鏡 が 音 た て て ゆ れ る 夜 風 の 独 り ぐ ら し

あ み に 鯉 の 大 き な や つ 一 匹 竿 か つ い で 帰 る 夕 焼

酒 屋 今 夜 は お そ く カ ウ ン タ ー の 塗 り 換 え し て い る

ここまではとなりのあひる二匹がついてくる

たどたと読むかんばんの字手をつないで歩く

少しだけ助言する夏の絵日記も終り

破れ畳のひとりの夜の安息

蚊 帳 に 潮 風 の 宿

まぶしい日差し隣もまだ新聞受けに新聞

あ ん た が き た あ し お と

落 葉 の 中 の 切 株 一 つ

鳩が歩いてい
る後ろから歩
いていく

ポケットマネー
借り甥の自動
車くろまに乗る正
月

缶詰の空缶が
ひとりぐらし
の灰皿

石をとられし
紅い月今夜み
て居る

石原武雄

昭和二年生

職業 理容業

申告、重いドアを押して入る

陽はビルに沈みあるじ店の前に立つ意味

ひよこならなくばかりのいのち

やわらかな春の遠望かすみ団地に光る池

釣堀につりびと菜の花いち面の風波打つ

春一番吹溜つくるマリ一つある

ぴりぴり太陽の渚は人の海にする

炎天を働いて来た顔がそのことは言はず

喘いで道、ひとすじを走る

バトミントン、少女ら中空へ打ちこんだまんまの秋

暁天の海鰯雲陽に生まれたり

研ぎすました刃が若葉の陽を求める

ひよいと鍵かけている女の眼と合う

ちよいま見た月がまあい一家団欒

影の孤独己について来る

屋根に切られた秋空にチリ紙交換する路地

妻の時間に釣って来てこの通り釣れると言う

移り来て古時計の振子の時を刻む音

開店の花飾って早春の雨降るを吉日とする

ちよっと止まりたい蝶が風と行ってしまう

佐藤弘典

昭和三年生

職業 染色業

額にそのまま入りたい海の入日

山の緑に赤い鳥居を置き人を歩かせる

丸木橋をくぐるそよ風の口笛が若葉

はち切れる若さのミニが揺れるも春

森の奥の音もなく落ちる葉の音

鉄橋押し流した水テレビから胸に流れる

顔つき合う昼のサイレン

めし屋のざわめきの中のめしくう

冷えこんだ夜道子等の笑顔が走り去った

知らぬどうしが語り合う山の湯の裸電球一ツ

別れ、足音が影をつれて去っていく

悪臭漂ふ公害の町の夕陽が沈む

ぐちを聞きつつ雨音を聞いている

炬燵でぬっくらいる俺をびしょ濡の雀が見ている

寝そべって雲の行く先が春の海

晩秋、枝に柿一ツ残して焚火の輪

よりそうて月をみている月が見ている

闇の中雪だけが白く大八車の荷が重い（追憶）

長旅のここを曲がれば我が家が見える

火の山の広さが赤牛遊ばしている

吉田雅童（本名 雅彦）

昭和四年生

職業 染色業（旗、幕、幟）

そうかそうだったのか夜道をかえる

父ちゃん昨日の雀の墓よほらその小さな雪饅頭

駐車禁止に吠える小さな町の小さな店のわれら

椿ポトリ真昼の秒針が廻った静けさ

柁に猿のこしかけこの旧家の因縁はなし

エリーゼの為の調べが春を呼ぶこの春のなが雨

みんなよく似合って喪服

雪ふる夜の純情ピアノのながい旋律

紫陽花玉虫いろのコートがゆく

庭の猿すべりが朱い、喪服脱いでいる

そしてだれもいなくなったダム満水の暮色

話が膝つきあわしている窓が篠つく雨

このがらさらりときながし旅立つ

この深い石の沈黙けふは花が散っている

紫陽花まったく朽ちて看とっている

一条の航跡が秋のまっただなか

こんな時にも顔つくるおんなで

灯ともした校庭がまぶしく子等さよならする

この木にしがみついていまは毛虫でござる

空は青きものの少年辞書を引き直す

伊藤清雄

昭和二十三年生

職業 会社員（金型製作）

鉄
削
る
音
の
波^{なみ}
音^{おと}

笈^{おい}摺^ず道^{どう}にかける小さな満願の千羽鶴かな

影、鷺のかげが飛んで行く

風雪の音を一人起きている

放下した心たんぽぽは一日陽を受ける

童^{わらへ}は母さんが好き泥んこが好き

ビー・アンビシヤス、少年風を上げさらに高きを思う

影と二人分の陽を戴^{いた}く

目^め
刺^{ざし}
口
あ
け
て
言
え
な
い
事

知人ばかりの見物に飛び込んで獅子を舞います

今朝生まれた子雀が陽をみて鳴いた

空はいつも青い星が出て夜にしてしまう

落
ち
て
芽
を
出
す

鉄
雨
に
濡
れ
て
遠
い
国
の
戦
慄

影
光
と
な
る
水
底
歎
異
抄
の
世
界

風
に
乗
り
ド
シ
ニ
ド
シ
ニ
綿
毛
綿
毛

若葉に緑酒注がれし東雲しののめのニンプの歌

まさに荒寥こうりょう背に負って老婆何をかわらう

無知からの不幸かともいぶし銀の午後

こつこつ働け小啄木こげらの望遠鏡シリウス覗く

下村直樹

昭和二十五年生

職業 画廊経営

廬なれば風に吹かれて伸びていく

書きたくない便りとしてもポストの口

太陽の恵みそのものとして頂く

ただ耐えるだけの人になって遂に逝く

何度も濡れたり乾いたりのシャツ着て働く

鬼の居ないかくれんぼ何時迄続ける気か

浮草として短い根はあり

若さとして屈辱にならぬものもあつたよ

寒月、ひとり漂うことを覚える

還らぬ日よ頬擦りたくなる八手の花

風雨よぎった屋根にきょうはきょうの陽が照る

視界ゼロの街愛する者達は手を組んで歩く

書き尽くされた紙の裏の白いページ

愛しい猫の首につけてやった鈴が落ちていた

抜き取った書物の間の暗い奥行

暗室 蠟^{ろう}涙^{るい} 見つめ固まっていく決意

風に吹かれても拮抗するしかない一日

ホラと言われ目にした焦点のない風景

人生、豆腐に逃げ込まざるを得なかった泥鰌

灰で縄を編んだ物語はなしが一冊の詩集

木曾士門（本名 佐藤進）

職業 会社員（旅行業）

昭和二十六年生

淋
し
さ
ば
か
り
の
影
と
ゆ
く

光
よ
影
よ
ま
わ
り
燈
籠
ゆ
る
ゆ
る
ま
わ
れ

柿
が
う
れ
て
と
ろ
け
そ
う
な
恋
話

た
っ
ぷ
り
水
を
張
っ
て
と
っ
ぷ
り
暮
れ
た
田
圃

暮れてから何をか捜す顔に出くわす

いつせいに芽ぶいてぞんぶんに濡れた空

起重機も眠る真夏の暑き吐息す

芦のささやきが夜風になるという話

そのぬくとさもふっと淋しくなる手のなかの手

陽のしずくへ風景がとけこんでしまった

空が受精し夏山幾重に光り充つ

風のささやかなうわさにうなずいている

春眠、沖に浮かんだ舟のうまそうな雲です

泣き虫はかあちゃんの背中にとろとろまどろむ夢かな

風は一輪草にふれればゆれる

水引草 風にゆれるはお陽さまです

炎天もくもくとクレーンは働く、つり上がった重量

舟は揺籃、春は眠れる水辺に櫂の音たて

雲が女体になったなら僕の情欲や

きらめきは乙女座のノアの方舟浮べましょう

作品においては、今日では表現として不適切とされる語句を含むものが

ありますが、作品が発表された時代の状況を鑑み、原文通りとしております。

層雲 城の会句集Ⅰ

発行 昭和五十二年（一九七七年）一月一日

発行元 城の会

層雲 城の会句集Ⅱ

鯨のたわ言(Ⅱ)

光陰何とやら、まったく早いもので、句集(Ⅰ)発刊より、もう一年経ちました。その折には、思いもよらぬ皆様のご厚情、各地からの感想文やら、激励の便りやら、加えてまた、貴重なる”層雲”のスペースまで割いて、勿体ない鑑賞を賜り、まことに有難く句集(Ⅱ)発刊に当り、改めて御礼申し上げます。

さて、歌舞伎調にて失礼乍ら

またここに、(Ⅰ)にも負けぬ駄作の数々、相並べますが、前回同様、いや前回以上に、すみからすみまで、ずずいと、ご高覧のほどおんねがい奉ります。

相申し遅れましたが、”伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ”、唄の文句じゃないけれど、伊勢の国は津の住人和田晴彦なる好青年、都は京の、泉の会と掛け持ち乍ら、城の会へもご入会、これも併せて、叱咤激励おんねがい奉ります。

城の会一同

昭和五十二年(一九七七年)十二月

目次

佐藤百秋

鬼頭いわお

加藤定一

加藤霞山

吉田雅童

和田晴彦

伊藤清雄

下村直樹

木曾士門

佐藤百秋（本名 清）

明治四十二年生

職業 日本画家

蟻の拾ってゆくつゆ

分け入った沼に生きものの匂う昼

川番舟に寝てお月さん傘さしている

とものとむらいにきているひだまりのとしより

ふる里は祭の露店で風船が笛ふいている

枯草を焼くに青い匂いもする

廃寺、土器焼く人いて尾花が白い

風の音で目がさめたお月さん

茶碗のぬくみを両手でうけている思案

哄笑の中に坐して黙している

まきわりのおとするいちにち冬の雨

青葉くらき流れに橋が常夜灯をつけている

白　い　煙　の　公　害　を　話　し　て　い　る　満　月

山　門　き　よ　う　は　ひ　ら　い　て　あ　る　白　い　椿

は　な　し　が　み　や　げ　の　か　る　い　旅　を　戻　る

夜　露　戸　締　ま　り　し　て　寝　て　仕　舞　っ　た　よ　う　な　門　灯

読経の抑揚がお蠟の火を静かなものとす

梅干匂う尼さんたすき襷はずしての挨拶

立ち寄る家があるので廻り道してゆく

かいつぶり阿呆な顔を出しまたくぐる

鬼頭いわお（本名 岩男）

大正二年生

職業 教員

無住の家、今年も寒椿は赤い

犬も人もイノコズチ一杯つけて散歩のお帰り

先祖が天秤棒かついで歩いた道法要に行く

今日もテレビで暮したと日記に記す老いらく

波音とデカンショのコーラス夜更る

そこな突堤にリール巻く少年に海は青く

鐘を打ち木魚たたいて孫の喜ぶお盆である

般若心経読誦三回お先祖様が帰らっしゃる

鉄路しらじらスト続く顔うつむけて花嫁

スクールバス着いて喜びが教室へ駆け込んでくる

詩吟朗々と夜の堤を歩く

今年も鋏の音パチパチ音は隣の庭

まんじゅしゃげ紅とかす万緑に

胸をじゅうぶんそらす運動雲一ひら流れて行く

わめくひつかく物投げる知恵遅れの子達と女教師

寒月、箸に挟んで骨拾う子として

給食の時間楽しく握り箸の子左利き

ひたむきにボタンはめはめ鼻に汗かく児

一日早く暦めくる癖格言が待っている

かげふみゴツコの日にばらまかれた子ども

加藤定一

大正四年生

職業 染料販売業

老の帽子片手に持ちつかぬ事を御たずね申す

水がゆらぐ水の中の橋もゆらぐ

一杯ひっかけてお月様へからんでいる

簡素な白木に新年のかしわ手がひびく

水の底を明るい色が泳いでゆく

裸になれば一匹の人間そそくさと湯に入る

時計の音が帰りを待っている

深々と雪つもる床の一幅なり

赤い空の落ち込む遠い堤防の線

影を従えて壺が貫禄を見せている

大きな口開けた家の後暗い雪を持っている

窓からの遠い屋上に旗がひらひらする好日

無住の寺しんしんと深く茂っている

月も特急に乗って走っている

人間塀の中に閉じこもってねじれた松を愛する

つばめの声がただけいつ迄も朝でいる日曜

人間のどぶ川私もその一人として渡る

風がまといつく柳の幹は太し

門の奥へと飛石が誘^{さそ}う

風に吊した鳥籠の下で風鈴がさえずる

加藤霞山（本名 肇）

大正十五年生

職業 会社員

焚火の煙がさける方へまわってきたりする

たこのあがらぬたこあげ暖冬の

ベッドタウン、バス待つ田んぼ丈高き枯あし

夜さむ細目の障子が灯をにがしている一軒

刈田と団地とちいさな駅風吹く

ふとも干して洗濯日和、のひとり

春雨、二軒先が豆腐屋さんのとうふ買う

こぼしたわずかの米障子の外にまく

あ
が
っ
た
た
こ
あ
げ
さ
せ
る

廃
屋
の
下
は
冬
の
海

悔
い
の
目
ざ
め

や
っ
ぱ
り
ひ
と
り
の
夕
飯
た
く
こ
と
と
す
る

一枚のメモと留守番する

蟬のぬけがら木に一つ洗濯物干す

ついてきていっしょにめしくう

活気のある方言がひるの休憩室のぞく

えほん、そらんじてよむこえ

少年と海に石投げて帰る時刻が来る

休日、どこにも行かぬよい天気だ

ひとりのさけとうふがふつつふつつ煮える

吉田雅童（本名 雅彦）

昭和四年生

職業 染色業（旗、幕、幟）

ひ
か
っ
て
木
の
芽

遮
断
機
降
り
て
か
ら
、
の
蝶
々

蝶
々
流
れ
を
き
て
正
午
の
サ
イ
レ
ン

昨
日
の
蝶
が
き
た
今
朝
の
軽
い
刷
毛
先

お休み所の旗も出た土筆たんぽぽ

その桐の木の弔意もう芽がきている

（ある漏示の壊死）

咲いて菜の花雑草は雑草として置く

山からきた水が田に老いた二人の菅笠

落日草原を染め蛇の孤独なとぐろ

嘘つかぬ蛇のあい炎吐く舌

老木におのがもの脱ぎ蛇不在

蛇とて月夜の木のてっぺん

銭貯めるつもりもない蛇の祠に住んでおる

石、おちてあかい椿の坐

手が出ぬ足が素通りする

蛙、二枚の雨戸してそろそろ寝るか

検屍の一まいドアの遮断におる

ノートは風がめくって少年の声が青菜の中

木漏れ陽、てっぺんにさえずるものおる

氷の刃という炎天の氷は切って売る

和田晴彦

昭和二十二年生

職業 公務員

雪の中窯にドベを塗っている

灰色の空から花びら

夜の畳とのお対話

静かな朝に日の丸走って行く

風 破 っ て 走 る 男

バ ケ ツ □ あ け て 雲 を 見 る

自 動 車 大 き な 顔 し て 座 っ て い る

窯 、 無 心 に 明 日 に ほ え る

娘 達 が 丸 く 笑 っ て い る

窯 火 赤 々 舌 を ベ ロ リ ベ ロ リ

赤 い 花 、 雪 の め が ね か け て い る

バ イ オ リ ン 、 風 と 帰 っ て 来 た

窯の中に暗いこおろぎを聞く

くずされた庭のうつろな石

そうですか、そんなのんきな顔してますか

運命の回転、鳥も静かに木の枝

花の道月が歩いていきます

さびしい鉛筆を見ている

太陽少女の顔に咲く

空白の日々の白雲しろいくも

伊藤清雄

昭和二十三年生

職業 会社員（金型製作）

鉄削る音凍てつかせ夜の母

振返ったたとて闇夜

捨石へ満月

寒月座を占める

我が人生開けば白紙ばかりの本

何より不自由になつてしまつた心白鳥しらとりなき渡る

怒る心怒らせ夏を焚火す

感極まり石榴ざくろの実

身一つ浮雲と長の旅です

風と来て柳が見送る

大空、悔いのない手を振っている

西日いっぱいさよならする

涼 風 団扇^{うちわ} 遊ばせている

や あ 兄 弟 、 月 が 顔 出 す

太陽系第十番惑星のかなた蛍消えてゆく

篠木^{しのぎ}の村の篠笹の露になりたい銀の星

ひそと揺れ鷺草は星へ飛びたい

遙かな記憶文字さえ考えてしまう

岩かけ時は七^{あじさい}変化になっ
てしまう

どこかで雲つかめ
そう
で
高波

下村直樹

昭和二十五年生

職業 画廊経営

窓をあけると夜の街が軍艦になっていた

芥箱あさる生きものの或る日の旅愁

シャボン玉のちっぽけな世界がはじける

墨絵のような風景に彼岸花の点景

夜更の街灯に浮く彫刻かと思う二人の愛の像かたち

黒の舟唄無用せめて密航したい夜の埠頭

酔えなかった今宵君に散らす白い花だった

レールが二本の線路に淋しい歌が聞こえる

尾っぽ下げている野良犬だ

くたびれきって目は遠くの街を見ていた

一つのドラマ内包し君は故郷へ帰るか

刹那、列車のドア締まる互いのまなざし

張りつめた氷へ写した顔に笑いがなかった

火傷その表出した水泡の企みを持つ

廃液入れたドラム缶一本捨てるところが無い

刺したり刺されたり真実ときに刃と化する

貰った優しさトランクへ異国にも置いておこう

異国の女ひとを抱く無言その視線の了解

気持伝っていくようにで女の笑に和らぐ

街で嗅いだ匂い肌や髪に沁みまた抱く

木曾士門（本名 佐藤進）

職業 会社員（旅行業）

昭和二十六年生

星の軌道へ僕等ふわふわただよっている

太陽、ガラス箱ケースのなか癒えている

朝の鈍い光を一枚一枚剥いでゆく

胎動という季節の芽ぶきに似て君は母

ガラス細工が毀れた肺でゼイゼイ生きている

白湯を砒素のように舐めまわし僕の失った青春

水のような日曜日、朝刊が鮮明に記憶をまさぐった

花覆う空気の冷えきったどん底

渦巻く風は光に満ち時は微熱もつ

逆光に胎児動けば女は美しく笑み

団地暮らし、ある日透明な四角い空を見ている

春へ風が転がってゆく風景

埋立地は春浅き白い午後のブルドーザー

村に星が湧きあふれ伝説となった人がいる

詩人と猫と、それからは初夏のまぶしさにつかれ

日時計の目盛短かくうなだれるひまわりの花

朝は画期的な色してラジオ体操のリズム

二月のひややかな朝日口づける

匙一杯の愛呑みほして我等淋しき人

なめくじみたいに生きて結晶している

作品においては、今日では表現として不適切とされる語句を含むものが

ありますが、作品が発表された時代の状況を鑑み、原文通りとしております。

層雲 城の会句集Ⅱ

発行 昭和五十三年（一九七八年）一月一日

発行元 城の会

層雲 城の会句集Ⅲ

鯨のたわ言(Ⅲ)

ことはほんとに、暑いながい夏でしたなも。この句集が皆さまのお目にかかっている頃は、多分年の暮れか、新年に成ってますかと、思いますなも。いま、この鯨のたわ言書かしてもらってますが、まだまだ暑いまっ盛りで、全く参ってしまいますなも。

今年は梅雨明けがあんまり早かったもんで半月も余分に、あつい夏を過さんらん。やっぱり、梅雨で雨で、期間だけは普通にあった方がよろしいはなも。とかなんとか、人間なんて勝手なもんで、梅雨中は、うっとおしいなも、ええかげんにはよ上がったらええになも、とか、ごたくせんばかり並べて、いざはよう上がり過ぎると、今度は暑い暑い、人間はやっぱりバチ当りばかりでしようかなも。

まあ、わたしらの日本国も、ええかげんひどい、困った国になりましたわなも。せっかく出かした米は、余っとる余っとるというて豚に喰わせたり、どうやらせると何やかんや云って海へ捨てるだけなし、高度成長しただか、なんだか、知らんが輸出入ばっかりに、頼っとるがなも、一体どうなることだろうなも、おまけに円高だとか、不景気だとか、ヒイヒイ、ワイワイ。こんなこと今更、当り前の

ことだと思いがなも、これが敗戦国のそれも三十数年経った、後遺症だらけのこと解らんでしょうかなも。あれあれどうしてこんなこと、こんなときに書き出したろうなも。ご免やす。ご免やす。

こんなこと、俳句や詩をやる人間には、無関係だったですなも、ええ、やっぱ無関係では、いかんことですかなも。

そういえば、自由律俳句がどうの、一行詩がどうの、と（まあ名称のことだろうと思いますがなも）また始まったらいいすなも。それこそ、わたし等には、あんまり関係ないと思いがなも、そう云うことは頭のええ、先生方に任かして、わたしらは、黙って下手な句でも詩でも出かしとればええ、と思いがなも。

とかなんとかまた、つまらんことばっかし云いましたが、堪忍してちょうだい。第三句集、それこそ、てんやわんやな句ばかり、めいめいが並べましたが、ほんとうに済まんことで御座いますなも、おひまなときにも観てやって頂戴するか。そしてたんと、叱ってやって頂戴なも。

城の会一同

昭和五十三年（一九七八年）八月

目次

佐藤百秋

鬼頭いわお

加藤定一

吉田雅童

和田晴彦

伊藤清雄

下村直樹

木曾士門

佐藤百秋（本名 清）

明治四十二年生

職業 日本画家

梅雨の晴れ間に隣からきた話のたね

田螺かくれた毛深いおんな

もち越すしあわせがその日ぐらしで

日課として上手に芥燃やす老となる

日かげりひぐらしの啼く湯につかっている

鈴は二人で鳴らそう桜月夜の権現さま

尼僧これはこれは情のこもった若き日の話で

色づいて時雨れる鎌切りの死とする朝

余命いくばく年金窓口でいただく

人形、目に手をあて泣いている語り手

朝なぎ遙けしポンポン船の一条の水尾

ままごとの母になった姉は死んだが

水鶏雨戸をたたく夜の寝酒とする

ちよつとそこまでおくったお月さんとかえる

お盆のふる里に帰った月とわたし

今日もよい日で川が流れている

寒月ころして歩む足もとがわれる

粃殻焼く火の赤々と野良のタとなる

つくしつくつく頭もたげてだんらん

もうしかってはくれぬ亡^は母^はの写真が出てきた

鬼頭いわお（本名 岩男）

大正二年生

職業 教員

若葉が匂う柿の木は残したい

つばき一輪おちてしじまをつくる

つばき緑の絵に一点の紅を落とす

五年ぶりの鶯の声少し早い雨戸を繰る

ガラス越しに手を振る子に病院を出る

相変らずの餓鬼大将住所も書かず賀状送ってくる

五月 晴れ 朝顔の苗 思案する

東京から九州に話をとばし退屈させぬあんまさん

母の日、じまんの寿司つくる母をもつ

連休外国飛行機満席列島不景気圏

殊に美しい朝顔選んで種とるしるし結んでおく

ぶどう狩り自分には一房もあればよい

グラジオラス竹に支えられて燃えている

のろのろと連なる車にせかせかと時計の針

ラジオ体操、万緑は跳躍の中に入って来る

蟻の道さんざん廻って厨の下にたどりつく

高麗人参茶いただいて何か爽かな出勤いたします

主人と足音を聞きわけ、犬でもう気付いている様子

幾度死のうとしたことか、淡々と語り精薄児の母

注射器に薬吸わせる限界、ためつつすかしつ

加藤定一

大正四年生

職業 染料販売業

理屈も何もないみんな飯喰っている

門に竹青く涼しい人が住んでいる

広い世間の出来事が部屋の片隅に映る

座席ゆったりと音に身をまかせ

幼い靴が一足もうかえってしまっていない

誰が来ようとこの暑さ明け放しの裸でいる

重い梅雨空に息づいて茂っている

はだかで地をたたたく雨を見ている

夕 風 へ 一 日 の か ら だ を お く

ど っ か り と 下 し た 尻 が 足 を 休 ま せ る

薄 紙 を 剥 ぐ よ う に 病 室 の 窓 が 白 ん で く る

倒 産 の 家 む か し か ら の 虫 が 鳴 い て い る

寝がえりをうつ遠い汽笛

女水を出し放しにしての重大な話がある

独酌の雨音を味はう

日向をもてあましている縁側

しずかに煙草のけむり双方の云い分をきいている

夕闇の中の人声がまだ動いている

枯野へ流れ出ているささやかなくらしの水

ひとつの門燈が夜を深めている

吉田雅童（本名 雅彦）

昭和四年生

職業 染色業（旗、幕、幟）

あ の 鬼 瓦 に お ち た 雷 だ と よ

石 に 雨 ふ る 短 律

は ば か り な が ら い ま は ば か り に 居 り ま す る

お ん な か な し び に く れ て よ り え も ん つ く ろ う て い く は

月も病んで撮られることか

キャップとペンとしばしそのままにいるとき

風、月はまた雲と訣れる

しかし、今宵月のシナリオに雲はなかった

この池も埋められますよお月さん

空き巢に夕日を懸けた蜘蛛の不在証明^{アリババ}

花は月の出の明日を推理する

鳥が一羽訃に降りた街にはやっぱい夕焼なかった

どうしても出てくるこやつにぎりこぶしで拭く

シリアスなその道であった殺人現場への道であった

出発とは結末のまたそんなドラマがはじまる

ストの是非論土筆摘まれて筆にある

暮れなずむ、蜘蛛の動かぬ殺意

ふられちまってひらきなおった花ですわ

昼月、花に追われた蝶の隠れ家

しかし遅すぎた、濡れすぎた花の言葉

和田晴彦

昭和二十二年生

職業 公務員

枯葉と私と旗は冬の風楽しむ

朝の鳩は屋根の上おのぼりさん見ている

月が星を呑もうとする冬の空です

雲を遊ばせているなにもない庭

ガラスの向こうの風景が春をささやく

二人の話風が聞いていってしまった

今日はいろんな事がありました、お月さん

白い靴光らせて夜の風に消える

草の上にいる空に雲少し遊ぶ

雲遊ぶ、少年の竿光らしている

杉の木こんもり山が背のびしている

石仏は青草の中考える人は雨の中で

ちよつと肩光らせて小壺座っている

石の楽しみよ鈴虫を聞く

干鰈の目になにも見えていない

ちよこんと買物籠に犬が一匹祇園町近く

青空の下旗日の旗が汚れている

赤い月がでていて風眠っている

人々の目の中にいる

青空、夢多い鳩飛んで行く

伊藤清雄

昭和二十三年生

職業 会社員（金型製作）

陽のスケッチブックアラバスターになった少女

大声地平線に消え点^{とも}りはじめる

瞽女は後姿ばかり夜桜の道

空白を重ねていく夜虹漏れる

陽
が
海
に
夢
た
く
す
白
樺

寒
風
鮫^あ鯨^ん
先生
の
弁
舌
は
続
く

議
論
続
か
せ
ア
ン
バ
ラ
ン
ス
な
風
に
な
る

若
葉
ふ
ん
わ
り
鉄
の
音
階

少女のぞき込むと緑におぼれる銀河

真っ二つに裂けた木が放つシーラカンスの独り言

子供が大地に画く神の化石

大きく息を吸い崩れる音

花
び
ら
風
に
乗
る
メ
ー
ビ
ウ
ス
の
帯

オ
カ
リ
ナ
流
れ
る
真
珠
の
あ
ぶ
く

深
海
の
ボ
レ
口
銀
線
に
触
れ
る
雪

躰
湯
に
う
か
せ
A
B
C
と
遊
ぶ
蝶

表紙の外のパージめくる黒い太陽

石ころが捨ててくれた夕日です

拍手ごめんなさい

さらに白い岳発音

下村直樹

昭和二十五年生

職業 画廊経営

丸め込んだパジャマに夢の系譜途切れたまま

俺の腑分から完成しよう解体新書

不吉な鳥がめざめるオーブンの中のパン

暖めてきた未改札の切符に鋏を入れる

能面の裏に潜む沈黙の果实

平野で育んだ凸凹への憧憬

鬼の優しさ知った鬼の号泣

いま表出する扇状地の伏流

僕のジャーニーに横積みされた本の欠伸

凍える愛の確かさ　つらら太くなってゆく

あいつ飛んでいったけど弾痕一つ残した

おれとおまえが在る　淋しさに鉢巻をして

運河に顔おとすと仮面浮きでてくる

沸騰する海に乗り 青年風を操る

密造酒飲みすぎた底なし沼の蛇の昇天

とどろ巻けない蛇が底なし沼に石を産む

風がさらう鱗粉風で押し止めている蝶

未知の闇へ虹を架け妊婦一枚の布を裁つ

闇に同化した鏡に夜はふくろう啼きにくる

よな夜な踊りでる密葬したピエロの反骨

木曾士門（本名 佐藤進）

職業 会社員（旅行業）

昭和二十六年生

女に他愛ない話をしてそれが輝かしい日であるように

妻の経度に僕の緯度 狭い地球儀にこの児の誕生

やわらかに平明に乳房吸いひかりの産毛

何事もなかったような日々をお前とめくっている

縫い目からこぼれたパン屑のぼろぼろ涙より哀しく

北に濃尾の野。人々いち早く冬眠す

一億年の思慕に堪え君よ成層圏へ翔^とべ

一日が了る。ああ、美し過ぎる運命論に似て

くびれた腰から生命^{いのち}崩れてゆく砂時計のことなども

陽は灼熱の神より烈しく草いきれ

コーン焼く夕空の何処か人骨の芳ばしさに似て

春日、石に抱かれ孵化している

カーブ過ぎれば怒濤浴び僕ら彎曲し果てる

葉脈透けて見える陽がみどりの時を打つ

まさぐれば記憶にぶらさがった蝶の翹ぶ厚く

寝起きに接吻、ああ朝を脱皮する

青空遠く身を投げ棄てて、果ててしまいたい

空が下痢模様なので僕は想像をたくましくする

空の青さに鳥が棲むその中の太陽の位置

夜がいい匂いさせみんな睡ってしまった男の夢

作品においては、今日では表現として不適切とされる語句を含むものが

ありますが、作品が発表された時代の状況を鑑み、原文通りとしております。

層雲 城の会句集Ⅲ

発行 昭和五十三年（一九七八年）十一月三十日

発行元 城の会

復刻 令和六年（二〇二四年）十月十日再発行

復刻責任 木曾士門